関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

魔女の手に渡ったAncrene Wisse : London, British Library, MS. Cotton Vitellius F viiの所有者についての一考察

著者	和田 葉子
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	38
ページ	A67-A77
発行年	2005-04-01
その他のタイトル	Ancrene Wisse: possessed by a witch? : a note on the ownership of London, British Library, MS. Cotton Vitellius F vii
URL	http://hdl.handle.net/10112/12575

魔女の手に渡った *Ancrene Wisse*

London, British Library, MS. Cotton Vitellius F viiの所有者についての一考察

和　田　葉　子

Ancrene Wisse: possessed by a witch?

— a note on the ownership of London, British Library, MS. Cotton Vitellius F vii

Yoko Wada

From the evidence of an inscription (imperfect because of a fire in 1731) on the last page of London, British Library, MS. Cotton Vitellius F vii, Emily Hope Allen concluded that the Vitellius manuscript must have been given by Joan Holand to Eleanor Cobham, the second wife of Humphrey Duke of Gloucester. In this paper I have re-examined the evidence. I propose that the French text of *Ancrene Wisse* in the Vitellius manuscript might have been written sometime while Joan Holand's great grandmother, Joan de Geneville (1285-1356), was young, in or around Wigmore or Ludlow. Both places have a strong connection with one of the earliest copies of *Ancrene Wisse* in English.

London, British Library, MS. Cotton Vitellius F viiにはフランス語訳の*Ancrene Wisse*が収録されている。[1] 14世紀初期に筆写されたと考えられているが、[2] そのフランス語は古く13世紀の面影を残している。[3] そして、このテキストは、13世紀前半に書かれたLondon, British Library, MS. Cotton Cleopatra C.vi[4] 及び13世紀中頃に写されたCambridge, Corpus Christi College, MS. 402[5] にそれぞれ収められている*Ancrene Wisse*と密接な関係があるとされている。前者はVitelliusテキストとのみ共通する誤りが多くあり、[6] 後者には、この写本のテキストとだけ共通する文章が見られるからである。[7] E.J. DobsonはCleaopatra写本には原作者自身

による加筆修正があり、[8] Corpus写本は原作の改訂版の清書だと考えている。したがって、Vitellius写本のフランス語版*Ancrene Wisse*の元になったテキストは、原作が出来てすぐに、おそらく原作とほぼ同時といえるほどのスピードで、製作されたのではないかと推測される。[9] この写本は非常に正確に筆写されているので、原作はフランス語で書かれたという説も主張されたこともあった。[10]

おそらく*Ancrene Wisse*の原作が成立したのと、非常に近い時期にフランス語版ができ、[11] そのテキストは、筆写され続け、2言語を理解できても、フランス語のほうが堪能だった女性たちに愛読され続けたと思われる。

英語の*Ancrere Wisse*は9写本現存している[12] のに対して、フランス語訳が含まれる写本は現在4つしか残存していないが、[13] フランス語版のテキストが大量に生産されていたかもしれないことを示唆する事実もある。Vitellius写本には、part 3の終わり頃から、part 4の後半部分まで、本文が大きく欠落している。[14] これは、明らかに筆写後にページが破損したのではない。というのは、テキストの途中で急に本文が抜け落ち、そこからすぐに欠落した後の部分へと文が続いているため、その箇所において脈略がなくなっている。先に述べたように、Vitellius写本のテキストと密接な関係があるCleopatra写本はpecia system[15] と呼ばれる方法で筆写されている。[16] これは13世紀からよく行われた筆写のやり方で、手本とする1つの写本をいくつかのセクションに分けて、複数の写字生が同時進行で書き写し効率よく複本を生産する方法である。Vitellius写本もまたpecia systemによって（あるいはこのやり方で筆写された写本を手本として）作成されたと考えて間違いなかろう。抜けたセクションを何らかの理由で手に入れることができなかったのであろう。欠落があるまま写本を仕上げた原因については様々なことが考えられるが、一つには「出版」が急がれたからであろう。[17] すなわち、依頼主から早く完成させてほしいと催促されたのかもしれない、あるいは、大量のフランス語版が他の何らかの理由で、すぐに必要であったからであったかもしれない。*Ancrene Wisse*のpart 4に次のような記述がある。

ȝef þe ne kimeð sone help, gred luddre wið hat heorte: *Us quequo, Domine, obliuisceris me in finem? Usquequo auerteris faciem tuam a me?* ȝ swa al þe salm ouer *Paternoster, Credo, Aue Maria* wið halsinde bonen o þin ahne ledene.[18]

('If help does not soon come to you, cry out more loudly with an urgent heart: *How long, O Lord, wilt thou forget me unto the end? How long dost thou turn away thy face from me?* and so on to the end of the psalm, then the *Paternoster*, the *Credo* and the *Ave Maria*, and

other prayers calling for help, in your own language.) [19]

興味深いことに、「自分自身の言語で」という言い回しが使用されている。もし、すべての聴衆が英語を母語としていたのであれば、「英語で」と言えばよいはずである。*Ancrene Wisse* の他の箇所にも、「英語またはフランス語の本を読むときに」、[20]「あなたの英語の本に」[21] と書かれているように、聴衆の中に、英語を読んだり聞いたりするときには理解できても、流暢に話すことはできないフランス語のネイティブ・スピーカーがいたことが推測される。

一体、フランス語のテキストを収めた写本をどんな人が読み、所有したのであろうか。

Vitellius写本の所有者については、１つの大きな手がかりがある。すなわち、最後のページに、次のような書き込みが見られる。[22]

...m. .Duchesse de Gloucestre du doun d...
...Kent: Plesance
Al en vn

この写本は、コレクターとして有名なSir Robert Cotton（1571-1631）[23] の蔵書として、LondonのCotton Houseにあった。しかし、1722年にはその建物が荒廃していたので、貴重書の保存のため、StrandにあるEssex Houseに移された。そこで７年という賃貸契約の期間が終了すると、火事が起こりやすい場所に立地しているという理由で、契約の更新はされず、今度はWestminsterにあるその名も不吉なAshburnham Houseに収められた。しかし、皮肉なことに1731年10月23日、そこで起こった火事[24] によって、蔵書は全焼を免れたものの、かなりの損傷を受けた。消防車がなかなか来なかったために、出来る限り多くの貴重書を窓から外へ放り投げて、本を救出しようとした記録が残っている。[25] ちなみに、この時、唯一残存している *Beowulf* のテキストを含む London, British Library, MS. Cotton Vitellius A.xv、[26] そしてラテン語訳の *Ancrene Wisse* が書かれている London, British Library, MS. Cotton Vitellius E.vii も危うく難を免れた。[27]

このような被害にあった結果、フランス語版 *Ancrene Wisse* の写本も熱によって羊皮紙が縮み変形しているだけでなく、ほとんど総てのフォリオのマージンの一部が焼け、テキストが完全には読めない状態である。そのため、最後のページに見られる所有者の手がかりとなる書き込みも全部を読み取ることができない。しかし、わずかに残された文字から、J.A. Herbert

が1943年のAllenの説を根拠にして、次のような結論を下している。[28] 箇条書きにするとこのようになる。

1）Humphrey, Duke of Gloucesterは‘Plesance’（現在のGreenwich Palace）を1433年に建て始め、妻のEleanorが妖術を使った罪で起訴された1441年まで、彼女と暮らしていた。
2）‘Al en vn’は彼女の名前 Eleanorをもじった言葉遊びであろう。したがって、1433〜1441年の間にこの写本がEleanorに贈られたと思われる。
3）疑いなく、贈ったのは8代目のケント公爵Thomas de Holandの未亡人 Joanである。

これらについて、一つずつ検証してゆきたい。
1）GreenwichにあったHumphreyの邸宅は、Edward I（在位1272-1307）の時代から王室の住居として使われていたと考えられている。Humphreyの父親であるHenry IV（在位1399-1413）は常にここで暮らしていた。その後、長男のHenry V（在位1413-1422）がこの邸宅をEdward IIIの孫でDuke of ExeterのThomas Beaufort（*c.*1377-1426）に与えた。Thomasが亡くなって2年経たないうちに、おそらく、Henry Vの遺言によって、Humphreyの所有となった。それ以来、彼のお気に入りの場所となり、1432年と1437年の間に改築し豪華な別荘に生まれ変わった。[29] 土地も増やし、その家は約200エーカーの公園に囲まれていた。この時期の公文書や私信の中で、この邸宅は‘the manor of Plesaunce’と呼ばれている。[30] 一般に、Humphreyは1433年にこの宮殿を‘Bella Court’と名づけており、‘Plesaunce’と名前を変更したのはHenry VI（在位1422-1461；1470-1471）の妃 Margaret of Anjou（*c.*1429-1482）であったといわれているが、[31] 実際は、すでにHumphreyがここに暮らしていた時に‘Plesaunce’と呼ばれていたのであった。

Duke of Gloucesterの2番目の妻 Eleanor Cobhamは1番目の妻Jacquelineの女官の1人であった。彼女は長年Humphreyの愛人であった。Humphreyは1428年に前妻との結婚を無効にし、Elenorとの間に2人の子どもをもうけている。[32] Jacquelineには国民が深い同情を示し、最初の妻を無慈悲に捨てたHumphreyは大きな非難を受けた。彼と仲の良かった詩人のJohn Lydgate（*c.*1370-*c.*1450）でさえも彼への反感を作品の中に表現した。[33] 異端者、ロラードとされた者たちがあちらこちらで火あぶりの刑に処されているのを人々が目にした時代に、[34] Oxfordの聖職者Roger BolingbrokeとWestminsterの St Stephen's教会の司教座聖堂参事会員Thomas Southwellの二人が王の命を奪うため妖術を使った、として告発された。BolingbrokeはEleanorも魔術を使い、彼らをそそのかしてHenry VIの叔父である彼女の夫Humphreyを王

位につかせようとした、と白状した。Eleanorはすぐさま捕らえられた。この事件をShakespeareが *Henry VI* 第2部で扱っていることはよく知られている。1441年、有罪の判決が下ると、彼女はLondonを3日間、頭を布で隠し、手にたいまつを持って裸足で歩かされた。Bolingbrokeは絞首刑の上、断頭、そして体を四つ裂きにされる刑に処せられたが、[35] EleanorはKentのLeeds城に拘禁された。その後、Chesterへ移され、1443年にはKenilworthに留置された。1446年、Man島へ移す命令が下され、その翌年WalesのおそらくFlint城で18年間、監禁されたままこの世を去った。[36]

つまり、1）については、正確には、邸宅の改築が行われた1432年と1437年の間から、捕らえられる1441年の間、彼女は現在のGreenwich Palaceである‘Plesaunce’に暮らしていたと思われる。

2）AllenにしたがってHerbertが述べているように、Vitellius写本が贈られたのは、彼女がこの邸宅に住んでいた時だったと考えられる。そして、inscriptionの‘Al en vn’は、英語とフランス語が混じった珍しい形ではあるが、[37]‘Eleanor’をもじった言葉遊びであり、よく行われていたようである。Allenは、‘Al en vn’には‘In God es al’に相当するような宗教的な意味もあるのだろう、と考える一方で、‘I think, however, that it is more likely to be amorous, and a compliment to the duke.’[38]と述べている。ちなみに名前をpunで表わした例をいくつか挙げると、Mowbrayは‘mulberry’、Eleanorの夫、Humphrey, Duke of Gloucesterは‘homme vrai’を使っていたという。[39]

3）HerbertはAllenにしたがって、贈った者は「疑いもなく」8代目のEarl of KentのThomas de Holand（*c.*1370-1400）の未亡人Joanだとしている。Allenは‘She [Joan] was the only person bearing the title Kent in the period 1433-41.’[40]と説明している。当時、写本は大切な財産とみなされ、しばしば母親が娘に、あるいは親戚の女性に遺産の一部として残す習慣があった。*Complete Peerage*のGloucester家の伯爵・公爵の家系図を調べると、[41]そこには、Thomas Holand（*c.*1350-1397）、第7代目のEarl of Kentの娘Eleanorの名前がある。彼女は、Roger Mortimer（1374-1398), Earl of March and of Ulsterとの婚姻によって、この家系図に現れることになった。彼女の義理の姉がCountess of Kent, Joan（*c.*1378-1442）である。Allenはさらに次のように述べて結論としている。[42]

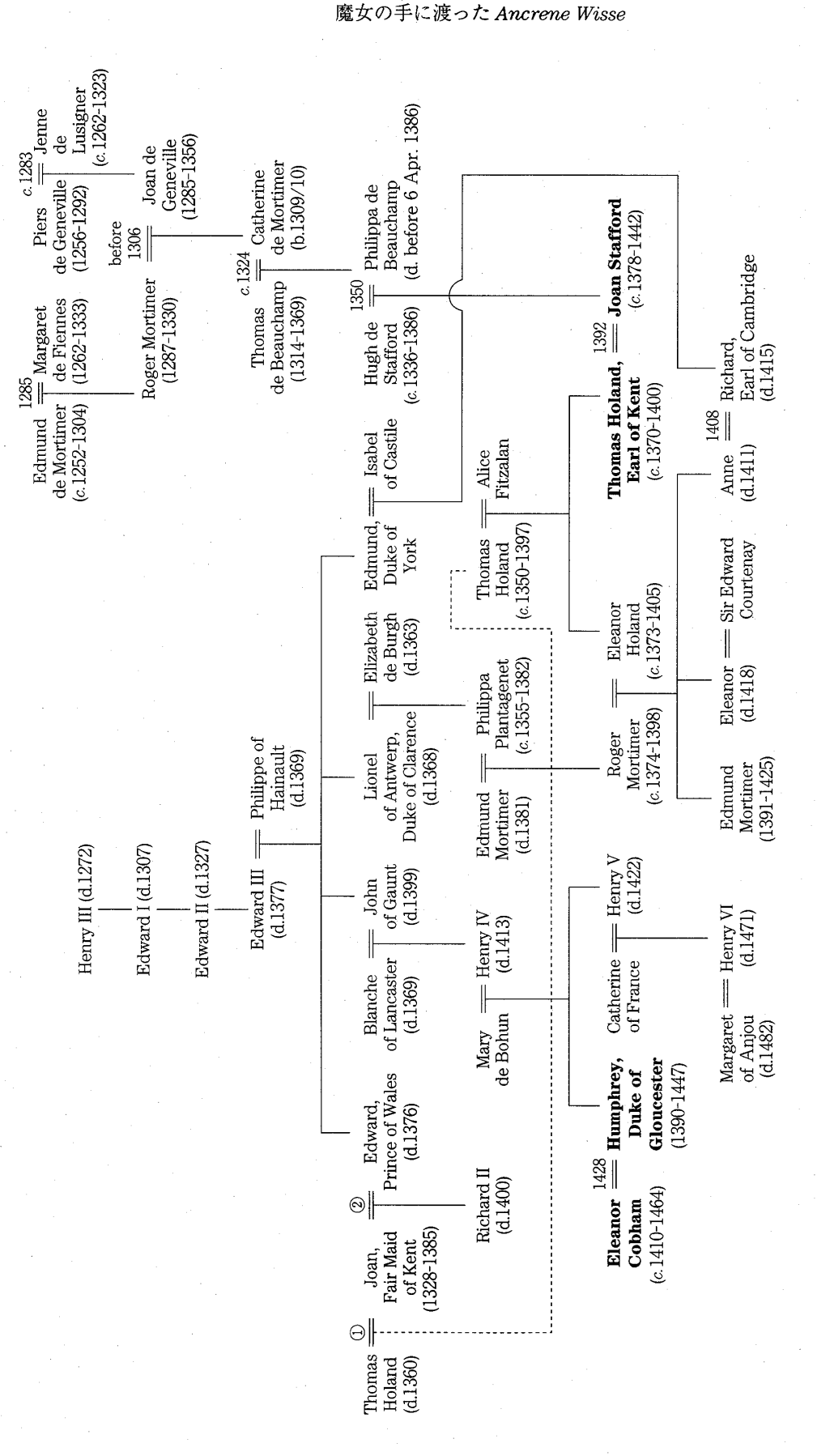
‘Her [Joan's] piety seems proved by her living in the abbey of Beaulieu. She was collaterally

related to the famous anchoress of a century earlier(c.1322), Katherine Lady Audley, and directly descended from Maud Countess of Clare, Gloucester and Hereford(d.1288), who owned an extant copy of the English text of the '"Ancrene Riwle" (Cott. MS., Cleop., C.VI.).'

このAllenの結論は非常に興味深い。なぜなら、最初に述べたように、Vitellius写本に含まれているフランス語版*Ancrene Wisse*のテキストは、Allenの言及しているLondon, British Library, MS. Cotton Cleopatra C.viの英語のテキストと密接な関係があると考えられているからである。[43)]

ここで、さらなる考察を少し付け加えてみたい。Joanの母方の家系を遡ると、この写本は、すぐにHerefordのWigomoreとShropshireのLudlowにたどり着く。Vitelliusのテキストと関係の深い、もう1つの写本、Cambridge, Corpus Christi College, MS. 402が献呈された先は、そこに書かれたinscriptionから、明らかにWigmore Abbeyであった。依頼人は、大聖堂の音楽監督で1302年にはWigmoreの大修道院長にも選ばれていたWalter de Ludlow seniorであった。[44)] そしてCorpus写本を贈った者はShropshire南部に住んでいたと思われるJohn Purcellという人物でNorburyやLudlowに土地を所有していた。彼の名前が出てくる記録としては、彼が赤ん坊であった1272年と1306年の間のものが残っている。[45)]

Eleanor CobhamにVitellius写本を贈ったと考えられるJoan Holand (*c.*1378-1442) の両親はHugh de Stafford, 2nd Earl of Stafford (*c.*1336-1386) とPhilippa de Beauchamp (*c.*1334-*c.*1386) である。Philippaの父親はThomas de Beauchamp, Earl of Warwick (1314-1369)、母親はCatherine (Katherine) de Mortimer (*c.*1309-*c.*1369) であった。CatheirneはWigmoreで生まれている。Catherineの両親は、Lord Roger Mortimer of Wigmore, 1st Earl of March (1287-1330) とJoan de Geneville (1285-1356) で、このJoanはShropshireのLudlow生まれであった。ちなみに彼女の父Piers de Geneville (1256-1292) はアイルランドのDublin出身である。母はフランス、VienneのLusignanで生まれたJoan Lusignan (*c.*1262-1323) だが、この2人は1283年頃、Ludlowで結婚している。Vitellius写本は14世紀初期に書かれたとされているので、[46)] Joan de Genevilleの若い頃にあたる。この写本は彼女、あるいは彼女の近くにいた女性(たち)のために、Ludlowにあったフランス語版のテキストから筆写されたものだったかもしれない。Joan de Genevilleの母親も祖母も先祖もフランスに住んでいたフランス人であったので、Joanはバイリンガルであったと考えられる。ちなみに夫のRoger Mortimerの両親はどちらもWigmore生まれだが、1285年、フランスで結婚式をあげている。この時代においても、フランス語に訳されたテキストが読まれ続け、筆写もされていたであろう背景が推測できる。



Vitellius 写本をめぐる家系図

（本論に関係すると思われる人々のみを扱っている。わかりやすくするため、多くの部分を省いている。）

さて、Eleanor CobhamにVitellius写本を贈ったのがJoan Holandであるとすれば、彼女らの関係は非常に遠い親戚にすぎない。どうしてJoanはEleanorにVitellius写本を贈ったのだろうか。２人の接点はどこにあったのか。Joanの夫Thomas Holandの妹Margaret Holand（d.1439）に鍵があるかもしれない。Margaretの夫John Beaufort, Earl of Somerset（d.1410）はThomas Beaufort（d.1426）の兄であった。ちなみに彼らの父親はJohn of Gauntである。先に述べたように、[47] Henry IVが1413年に亡くなるとGreenwichの家はThomasのものとなった。Margaretは夫の死後も、かつての兄嫁として、この邸宅を訪れていた可能性がある。Margaretを介して、彼女の亡き兄Thomas Holandの未亡人Joanもここに招かれていたかもしれない。この邸宅がHumphreyの所有するところとなってからも来る機会があったとすれば、JoanがEleanor Cobhamと‘Plesaunce’で顔を合わせて親しくなったとも考えられる。

JoanがThomas Holandと結婚したのは1392年だった。しかし結婚生活はそう長く続かなかった。夫は仲間とHenry IVの暗殺を企て、失敗、暴徒に捕まり、1400年打ち首になった。彼の体はCirencester修道院に埋葬されたが、首だけはロンドン塔の上にさらされた。Eleanor CobhamがHenry IVの孫であるHenry VIの失脚を狙った魔女として告発されたのが1441年、[48] Joanの亡くなったのはその翌年であった。[49]

13世紀初期に英語で書かれた*Ancrene Wisse*は、様々な聴衆のために種々のヴァージョンが生まれ、多くの英語の写本が生み出された。そして、原作が書かれて恐らくすぐに、フランス語を母語とする者のためフランス語に翻訳され、少なくとも14世紀初期まで筆写され続けた。その写本の１つは、15世紀、魔女として告発されたEleanor Cobhamのものとなった。彼女が、蔵書家であった夫Humphrey, Duke of Gloucester[50] とともに暮らした‘Plesaunce’には、頻繁に人文主義の学者や芸術家たちが訪れていたことであろう。[51] このVitellius写本は、彼らの目に触れる機会はあったのだろうか。それは、やがてコレクターのSir Robert Cottonの手に渡り、Cotton Collectionとして幾度と引越しを繰り返した。[52] 最も安全な収納場所として選ばれたはずのAshburnham Houseでは、不幸にも火事に遭うが、危うく全焼を免れる。この写本は、火あぶりの刑を免れたEleanorの代わりに炎にさらされたかのようだ。しかし、彼女は城に幽閉されたまま不運な最期を遂げた。Vitellius写本は、現在、ようやくロンドンの大英図書館の書庫の中に安住の地を得た。Eleanorと同様、Vitellius写本は、かくも数奇な運命をたどったのであった。[53]

注

1) J.A. Herbert (ed.), *The French Text of the Ancrene Riwle Edited from British Museum MS. Cotton Vitellius F vii*, EETS o.s. 219 (London, 1967); Thomas Smith, *Catalogue of the Mannscripts in the Cottonian Library 1696,* edited by C. G. C. Tite (Cambridge, 1984), 103.

2) Herbert, The French Text, ix.

3) E. J. Dobson, *The Origins of* Ancrene Wisse (Oxford, 1976), 300.

4) E. J. Dobson (ed.), *The English Text of the Ancrene Riwle Edited from B.M. Cotton MS. Cleopatra C.VI*, EETS o.s. 267 (London, 1972).

5) J. R. R. Tolkien, *The English Text of the Ancrene Riwle: Ancrene Wisse Edited from MS. Corpus Christi College Cambridge 402*, EETS o.s. 249 (London, 1962).

6) Dobson, *The Origins*, 300.

7) Dobson, *The Origins*, 265.

8) Dobson, *The English Text*, xciii-cxl.

9) Dobson, *The Origins*, 286-9.

10) Dobson, *The Origins*, 300; G. C. Macaulay, 'The "Ancren Riwle"', *Modern Language Review* 9 (1914), 63-78.

11) DobsonはAnnora de Braose (*c.*1190-after 1241)のために、フランス語版が作られたという仮説を立てている (*The Origins,* 309).

12) Cambridge, Corpus Christi College, MS. 402 (the mid 13th century); Cambridge, Gonville and Caius College, MS. 234/120 (the middle or the second half of the 13th century); Cambridge, Magdalene College, MS. Pepys 2498 (the middle of the second half of the 14th century); London, British Library, MS. Cotton Cleopatra C.vi (the first half of the 13th century); London, British Library, MS. Cotton Nero A.xiv (the second quarter of the 13th century); London, British Library, MS. Cotton Titus D.xviii (the second quarter of the 13th century); London, British Library, MS. Royal 8.C.i (the early or mid-15th century); Oxford, Bodleian Library, MS. Eng.poet.a.1 (*S.C.* 3938-3942) (towards the end of the 14th century); Oxford, Bodleian Library, MS. Eng. th. C.70 (the first half of the 14th century).

13) Cambridge, Trinity College, MS. R.14.7 (883) (the late 13th century or early 14th century); London, British Library, MS. Cotton Vitellius F.vii (the early 14th century); Oxford, Bodleian Library, MS. Bodley 90 (*S.C.* 1887) (the late 13th century or early 14th century); Paris Bibiothèque Nationale, MS. français 6276 (the late 13th or the early 14th century).

14) Herbert, *The French Text*, 136.

15) Graham Pollard, 'The *Pecia* System in the Medieval Universities', *Medieval Scribes, Manuscripts, and Libraries: Essays Presented to N.R. Ker*, edited by M.B. Parkes & A.G. Watson (London, 1978), 145-161.

16) Dobson, *The English Text*, xxxiv.

17) Dobson, *The Origins*, 303.

18) Tolkien, *The English Text*, 150. フランス語版のVitellius写本も 'Si tost ne vous vient aide, criez plus haut od feruent queor: Usquequo, domine, obliuisceris me? et issi toute la psalme, Pater Noster, Credo, Aue Maria od coniurantes prieres en vostre langage demeine.' (Herbert, *The French Text*, 203-4)と、同様に「自分の言語で」となっている。下線は筆者による。

19) M. B. Salu (transl.), *Ancrene Riwle (The Corpus MS.: Ancrene Wisse)* (London 1955), 129.

20) 'Each may say them in the way she likes best, and so also when you say versicles from the Psalter, when you read English or French books, and when you make holy meditations.' (Salu, *Ancrene Riwle*, 19)

Corpus写本では、'Euchan segge as best bereð hire on heorte, verseilunge of Sawter, redunge of Englisc oðer of Frensch, halie meditatiuns.' (Tolkien, *The English Text*, 26-7)、フランス語版のVitellius写本にはこの部分とその前後の箇所がない (Herbert, *The French Text*, 30-31)。

21) 'Have you not also a similar story in your English book about St Margaret, about the devil Rufinus, Belial's brother?' (Salu, *Ancrene Riwle*, 108) Corpus 写本では、'Nabbe ȝe alswa of Ruffin þe deouel Beliales broðer in ower Englische boc of Seinte Margarete?' (Tolkien, *The English Text*, 125), フランス語版のVitellius写本では、'Nauez vous cest ausi de Rufon li diable frere a belial en vostre liure de Seinte Margarete?' (Herbert, *The French Text*, 165.)となっており、「英語の」の部分がない。

22) Herbert, The French Text, xii.

23) Colin G. C. Tite, *The Manuscript Library of Sir Robert Cotton*, Panizzi Lectures 1993 (London, 1994); Christopher J. Wright (ed.), *Sir Robert Cotton as Collector* (London, 1997).

24) '23. [October] A Fire broke out in the House of Mr *Bently,* adjoining to the King's School near *Westminster Abbey,* which burnt down that part of the House that contained the King's and *Cottonian* Libraries: almost all the printed Books were consumed and part of the Manuscripts. Amongst the latter, those which Dr *Bentley* had been collecting for his *Greek Testament,* for these last ten Years, valued at 2000£.' (*The Gentleman's Magazine: or, Trader's Monthly Intelligencer* October, 1731, 451) ちなみにOxfordの Christ Churchには彫刻家John Michael Rysbrack (1693-1770)による、この火事の様子を目撃したDr Friendの表情豊かな胸像がある。

25) 'At two o'clock in the morning of Saturday, Oct. 23, 1731, fire broke out in the chimney of a stove in the room below the Libraries at Ashburnham House, and spread rapidly to the woodwork of the room above. .... Dr Bentley, nominally, we may suppose, as his son's guest, was living in the Librarian's lodgings at the time of the fire, and an eyewitness records the spectable of the Doctor in 'nightgown' and great wig carrying a volume of the Codex Alexandrinus under his arm to a place of safety. Casley was also present and took part in the work of salvage. The main part of the collections appears to have been rescued by throwing the books out of the windows, a fact which goes far to explain why the surviving examples of mediaeval binding in the two collections are so few.' (Sir George F. Warner and Julius P. Gilson, *British Museum Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and King's Collections* 1 (Oxford, 1921), xxx-xxxi.)

26) Kevin Kiernan, *Beowulf and the Beowlf Manusctipt* (Ann Arbor KY, 1997), 66-8.

27) この写本をHenry VIIIが所有していたことが知られている。Charlotte D'Evelyn (ed.), *The Latin Text of the Ancrene Riwle Edited from Merton College MS.* 44 *and British Museus MS. Cotton Vitellius E vii*, EETS o.s. 216 (Oxford 1944), xiii; Warner and Gilson, *British Museum Catalogue,* 180; James P. Carley, 'The Royal Library as a source for Sir Robert Cotton's collection: a preliminary list of acquisitions', *Sir Robert Cotton,* ed. Wright, 222.

28) Herbert, *The French Text*, xii-xiii.

29) G. E. Cokayne; with Vicary Gibbs, H. A. Doubleday, Geoffrey H. White, Duncan Warrand and Lord Howard de Walden, editors, *The Complete Peerage of England, Scotland, Ireland, Great Britain and the United Kingdom, Extant, Extinct or Dormant by G.E.C.* 13 vols in 14 (1910-1959; reprinted in 6 vols; Gloucester, 2000), vol. 2, 734.

30) K. H. Vickers, *Humphrey Duke of Gloucester: a Biography* (London, 1907), 445.

31) Royal Naval College, *Greenwich Palace: a History of What is now the Royal Naval College and the National Maritime Museum, from Earliest Times to 1939* (Greenwich, 1939), 2-3.

32) Arthur と Antigone。Antigone はHenry Grey, Earl of Tankerville と結婚した。(Cockayne *et al.*, *Complete*

Peerage 2, 736 n. g.)

33) 'The prynci's hert against al goddess lawe/Frome heos promesse truwe alle to withdrawe/To straunge him, and make him foule forsworne/Unto that godely faythfull truwe pryncesse.' (Vickers, *Humphrey*, 205); also 390.

34) Vickers, *Humphrey*, 269-70. ちなみにJoan of Arcが魔女として火あぶりの刑になったのは1431年であった。

35) Vickers, *Humphrey*, 273.

36) Vickers, *Humphrey*, 273-4.

37) Hope Emily Allen, 'Eleanor Cobham', *The Times Literary Supplement* 22 March, 1934, 214; Clotilda Marson, 'Eleanor Cobham', *The Times Literary Supplement* 12 april, 262.

38) Allen, 'Eleanor', 214.

39) Allen, 'Eleanor', 214.

40) Allen, 'Eleanor', 214.

41) Cockayne *et al.*, *Complete Peerage* 2, between 736 and 737.

42) Allen, 'Eleanor', 214.

43) See p. xx above.

44) Tolkien, *The English Text*, xvii.

45) Tolkien, *The English Text*, xvii-xviii.

46) See note 2) above.

47) See p. 4 above.

48) Cockayne et al., *Complete Peerage* 2, 736.

49) Cockayne *et al.*, *Complete Peerage* 3, 159.

50) Humphreyの蔵書については、Vickers, *Humphrey*, 426-38. Oxfordへの寄贈については、Vickers, *Humphrey*, 396-409.

51) Humphreyの人文主義者たちとの広い交友関係についてはVickers, *Humphrey*, 340-82.

52) Warner *et al.*, *British Museum Catalogue*, xxxi.

53) この論文は平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（C)(2）課題番号14510555）を受けて執筆した。